

(4) 申請年度と痴呆老人自立度のクロス表

痴呆老人自立度の度数について、どの年度も「正常」がそれぞれ全体の3割程度を占めていた。年々、増加する傾向があったのは、IとIIbの高齢者であった。

表 I-16 申請年度と痴呆老人自立度のクロス表

申請年度	痴呆老人自立度								合計
	正常	I	IIa	IIb	IIIa	IIIb	IV	M	
1999年度申請	870422	384452	156559	303625	317539	110495	205616	62766	2411474
2000年度申請	1417471	828872	308057	574753	562148	196892	318153	99549	4305895
2001年度申請	1578370	1005920	356262	667843	604339	202272	296630	90270	4801906
2002年度申請	1616788	1046655	361518	681803	591165	193067	286604	90472	4868072
2003年度申請	1672687	1127913	383811	744934	620834	195782	315093	90616	5151670
2004年度申請	268050	179306	60760	120231	98541	29839	48374	12639	817740
合計	7423788	4573118	1626967	3093189	2794566	928347	1470470	446312	22356757

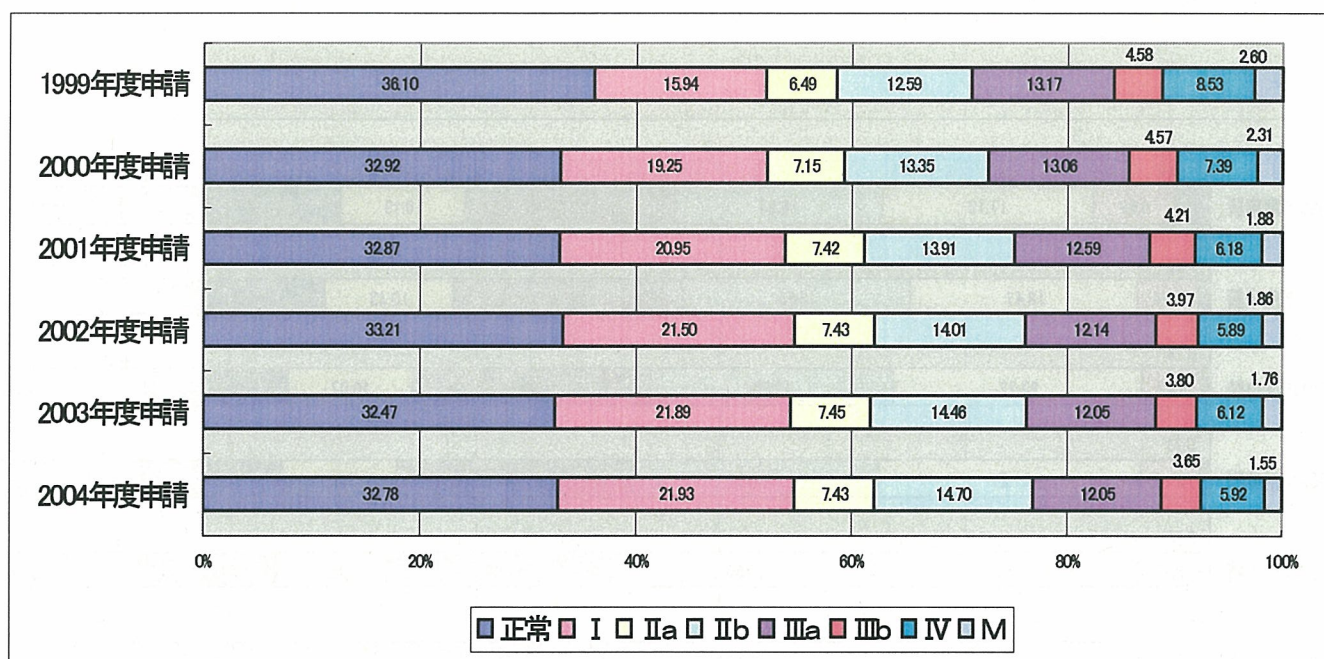


図 I-7 申請年度毎の痴呆老人自立度の割合

第4章 認定調査項目からみたわが国の要介護高齢者の特徴

1.新旧共通項目からみた要介護高齢者の特徴（基本情報に関して）

(1) 麻痺（左上）

麻痺（左上）の度数について、「なし」が17,952,165名(80.30%)で全体の8割以上を占めていた。

表 I-17 麻痺（左上）

	度数	パーセント
なし	17,952,165	80.30
あり	4,404,592	19.70
合計	22,356,757	100.00

(2) 麻痺（右上）

麻痺（右上）は、「なし」が17,938,345名(80.24%)で全体の8割以上を占めていた。

表 I-18 麻痺（右上）

	度数	パーセント
なし	17,938,345	80.24
あり	4,418,412	19.76
合計	22,356,757	100.00

(3) 麻痺（左下）

麻痺（左下）は、「あり」が14,370,497名(64.28%)で全体の6割以上を占めていた。

表 I-19 麻痺（左下）

	度数	パーセント
なし	7,986,260	35.72
あり	14,370,497	64.28
合計	22,356,757	100.00

(4) 麻痺（右下）

麻痺（右下）は、「あり」が14,323,553名(64.07%)で全体の6割以上を占めていた。

表 I-20 麻痺（右下）

	度数	パーセント
なし	8,033,204	35.93
あり	14,323,553	64.07
合計	22,356,757	100.00

(5) 麻痺（その他）

麻痺（その他）は、「あり」が3,353,221名(15.00%)で、「なし」が19,003,536名(85.00%)であった。

表 I-21 麻痺（その他）

	度数	パーセント
なし	19,003,536	85.00
あり	3,353,221	15.00
合計	22,356,757	100.00

(6) 拘縮（肩関節）

拘縮（肩関節）は、「なし」が16,792,872名(75.11%)で全体の7割以上を占めていた。

表 I-22 拘縮（肩関節）

	度数	パーセント
なし	16,792,872	75.11
あり	5,563,885	24.89
合計	22,356,757	100.00

(7) 拘縮（肘関節）

拘縮（肘関節）は、「なし」が19,244,073名(86.08%)で全体の8割以上を占めていた。

表 I-23 拘縮（肘関節）

	度数	パーセント
なし	19,244,073	86.08
あり	3,112,684	13.92
合計	22,356,757	100.00

(8) 拘縮（股関節）

拘縮（股関節）は、「なし」が18,578,224名(83.10%)で全体の8割以上を占めていた。

表 I-24 拘縮（股関節）

	度数	パーセント
なし	18,578,224	83.10
あり	3,778,533	16.90
合計	22,356,757	100.00

(9) 拘縮（膝関節）

拘縮（膝関節）は、「なし」が13,176,603名(58.94%)で全体の6割近くを占めていた。

表 I-25 拘縮（膝関節）

	度数	パーセント
なし	13,176,603	58.94

あり	9,180,154	41.06
合計	22,356,757	100.00

(10) 拘縮（足関節）

拘縮（足関節）は、「なし」が19,131,663名(85.57%)で全体の8割以上を占めていた。

表 I-26 拘縮（足関節）

	度数	パーセント
なし	19,131,663	85.57
あり	3,225,094	14.43
合計	22,356,757	100.00

(11) 拘縮（その他）

拘縮（その他）は、「なし」が18,465,817名(82.60%)で全体の8割以上を占めていた。拘縮は、肩、肘、膝、足など、それぞれ2割程度に発症していた。

表 I-27 拘縮（その他）

	度数	パーセント
なし	18,465,817	82.60
あり	3,890,940	17.40
合計	22,356,757	100.00

(12) 寝返り

寝返りは、「つかまらないでできる」が10,450,940名(46.75%)で全体の半数程度は自立しており、「何かにつかまればできる」が8,801,695名で39.37%と要介護高齢者の86.12%においては、なんとか自立できる状況であった。

表 I-28 寝返り

	度数	パーセント
つかまらないでできる	10,450,940	46.75
何かにつかまればできる	8,801,695	39.37
できない	3,104,122	13.88
合計	22,356,757	100.00

(13) 起き上がり

起き上がりは、「何かにつかまればできる」の割合が最も高く12,889,001名(57.65%)であった。「つかまらないでできる」4,946,150名を合わせると全体の約8割がなんとか自立できる状況であり、「寝返り」より低い割合であった。

表 I-29 起き上がり

	度数	パーセント
つかまらないでできる	4,946,150	22.12
何かにつかまればできる	12,889,001	57.65
できない	4,521,606	20.22
合計	22,356,757	100.00

(14) 両足での立位

両足での立位は、「支えなしでできる」が10,073,243名(45.06%)、次いで「何か支えがあればできる」が7,718,563名で34.52%を占め、これら合計の約8割が自立できる可能性が示されていた。これは、「起き上がり」の自立度とほぼ同じ割合を示していた。

表 I-30 両足での立位

	度数	パーセント
支えなしでできる	10,073,243	45.06
何か支えがあればできる	7,718,563	34.52
できない	4,564,951	20.42
合計	22,356,757	100.00

(15) 歩行

歩行は、「何かにつかまればできる」が10,493,266名(46.94%)で全体の半数程度で最も割合が高く、次いで「つかまらないでできる」5,616,273名(25.12%)を占め、両方で7割を超える程度であった。これは「両足での立位」の8割の自立可能性群の割合に比較すると若干、低い割合であった。

表 I-31 歩行

	度数	パーセント
つかまらないでできる	5,616,273	25.12
何かにつかまればできる	10,493,266	46.94
できない	6,247,218	27.94
合計	22,356,757	100.00

(16) 移乗

移乗は、「自立」が12,627,992名(56.48%)で全体の半数以上を占めていた。次いで「見守り」が319,8091名(14.3%)で続いていたが、この「見守り」には、何らかの介助が必要と推察されることから、移乗の自立可能性群の割合は、歩行の7割よりもさらに低かった。

表 I-32 移乗

	度数	パーセント

自立	12,627,992	56.48
見守り等	3,198,091	14.30
一部介助	2,496,416	11.17
全介助	4,034,258	18.04
合計	22,356,757	100.00

(17) 立ち上がり

立ち上がりは、「何かにつかまればできる」が15,133,147名(67.69%)で全体の約7割を占めていた。「つかまらないでできる」は10.06%と少なく、要介護高齢者においては、何かつかまる物、あるいは人がいて、立ち上がることができる状態であることが示されたといえよう。

表 I-33 図 立ち上がり

	度数	パーセント
つかまらないでできる	2,248,617	10.06
何かにつかまればできる	15,133,147	67.69
できない	4,974,993	22.25
合計	22,356,757	100.00

(18) 片足での立位

片足での立位は、「何か支えがあればできる」が11,520,408名(51.53%)で全体の半数程度を占めていた。片足での立位を「支えなしでできる」のは、2,240,731名(10.02%)で立ち上がりができる要介護高齢者とほぼ同じ割合であった。

表 I-34 片足での立位

	度数	パーセント
支えなしでできる	2,240,731	10.02
何か支えがあればできる	11,520,408	51.53
できない	8,595,618	38.45
合計	22,356,757	100.00

(19) 洗身

洗身は、自立、一部介助、全介助がそれぞれ全体の3割程度を占めていた。

表 I-35 洗身

	度数	パーセント
自立	6,777,049	30.31
一部介助	7,620,612	34.09
全介助	6,757,241	30.22
行っていない	1,201,855	5.38
合計	22,356,757	100.00

(20) じょく創

じょく創は、「ない」が21,158,110名(94.64%)で、ほとんどの要介護高齢者に発生していなかった。

表 I-36 じょく創

	度数	パーセント
ない	21,158,110	94.64
ある	1,198,647	5.36
合計	22,356,757	100.00

(21) 皮膚疾患

皮膚疾患は、「ない」が16,779,487名(75.05%)で全体の7割以上で大勢を占めていたが、3割近くの要介護高齢者には、何らかの皮膚疾患があることがわかった。

表 I-37 皮膚疾患

	度数	パーセント
ない	16,779,487	75.05
ある	5,577,270	24.95
合計	22,356,757	100.00

(22) えん下

えん下は、「できる」が17,060,738名(76.31%)で全体の7割以上を占めていたが、2割が「見守り」が必要とされ、3%は、「できない」と回答されていた。

表 I-38 えん下

	度数	パーセント
できる	17,060,738	76.31
見守り等	4,624,589	20.69
できない	671,430	3.00
合計	22,356,757	100.00

(23) 食事摂取

食事摂取については、「自立」が15,343,681名(68.63%)で全体の7割程度で最も割合が高く、次いで「見守り」が2,833,782名(12.68%)で続いていた。何らかの介助を必要とする要介護高齢者の割合が約2割も占めていることが明らかにされた。

表 I-39 食事摂取

	度数	パーセント
--	----	-------

自立	15,343,681	68.63
見守り等	2,833,782	12.68
一部介助	2,194,606	9.82
全介助	1,984,688	8.88
合計	22,356,757	100.00

(24) 口腔清潔

口腔清潔は、「自立」が 12,874,643 名(57.59%)で全体の半数以上、一部介助が 5,395,562 名 (24.13%) で 4 割以上が何らかの介助を必要としていた。

表 I-40 口腔清潔

	度数	パーセント
自立	12,874,643	57.59
一部介助	5,395,562	24.13
全介助	4,086,552	18.28
合計	22,356,757	100.00

(25) 洗顔

洗顔は、「自立」が 13,093,051 名(58.56%)で全体の半数以上を占め、一部介助が 5,468,179 名 (24.46%) でこの自立の割合は、口腔清潔と類似していた。

表 I-41 洗顔

	度数	パーセント
自立	13,093,051	58.56
一部介助	5,468,179	24.46
全介助	3,795,527	16.98
合計	22,356,757	100.00

(26) 洗髪

洗髪は、「自立」が 13,957,195 名(62.43%)で全体の 6 割以上を占め、「一部介助」が 3,703,081 名 (16.56%) であった。洗髪は、口腔清潔 18.28%、洗顔の 16.98%よりも「全介助」の割合が高かった。

表 I-42 洗髪

	度数	パーセント
自立	13,957,195	62.43
一部介助	3,703,081	16.56
全介助	4,696,481	21.01
合計	22,356,757	100.00

(27) つめ切り

つめ切りは、「全介助」が 12,483,674 名(55.84%)で半数以上の要介護高齢者は、介助が必要である行為であった。「自立」は、わずかに 28.17%しかおらず、要介護高齢者にとっては困難な行為であると推察された。

表 I-43 つめ切り

	度数	パーセント
自立	6,297,084	28.17
一部介助	3,575,999	16.00
全介助	12,483,674	55.84
合計	22,356,757	100.00

(28) 上衣の着脱

上衣の着脱は、「自立」が 10,913,161 名(48.81%)で最も割合が高かったが、次いで「全介助」が 4,814,547 名 (21.53%)と続いていた。

表 I-44 上衣の着脱

	度数	パーセント
自立	10,913,161	48.81
見守り等	2,049,055	9.17
一部介助	4,579,994	20.49
全介助	4,814,547	21.53
合計	22,356,757	100.00

(29) ズボン等の着脱

ズボン等の着脱は、「自立」が 10,487,201 名(46.91%)で全体の 4 割以上を占めていたが、次いで全介助が 5,801,227 名(25.95%)で上着よりもズボンのほうが若干、介助を必要とする割合が高かった。これは、麻痺などが上肢よりも下肢に集中していることが影響していると推察される。

表 I-45 ズボン等の着脱

	度数	パーセント
自立	10,487,201	46.91
見守り等	1,932,982	8.65
一部介助	4,135,347	18.50
全介助	5,801,227	25.95
合計	22,356,757	100.00

(30) 薬の内服

薬の内服は、「自立」が7,833,154名(35.04%)、一部介助が9,538,831名(42.67%)、全介助が4,984,772名(22.30%)で、一部介助の割合が最も高かった。

表 I-46 薬の内服

	度数	パーセント
自立	7,833,154	35.04
一部介助	9,538,831	42.67
全介助	4,984,772	22.30
合計	22,356,757	100.00

(31) 金銭の管理

金銭の管理は、「全介助」が10,181,539名(45.54%)で全体の半数程度を占め、最も高い割合であった。次いで自立が7,147,817名(31.97%)と続いていた。

表 I-47 金銭の管理

	度数	パーセント
自立	7,147,817	31.97
一部介助	5,027,401	22.49
全介助	10,181,539	45.54
合計	22,356,757	100.00

(32) 視力

視力は、「普通」が15,201,468名(67.99%)で全体の6割以上を占め、最も高い割合を示していた。

表 I-48 視力

	度数	パーセント
普通	15,201,468	67.99
1m離れて見える	4,650,531	20.80
目の前で見える	1,366,214	6.11
ほとんど見えない	483,236	2.16
判断不能	655,308	2.93
合計	22,356,757	100.00

(33) 聴力

聴力は、「普通」が 12,455,161 名(55.71%)で全体の半数以上を占め、最も高い割合を示していた。視力よりは聴力のほうが、自立度は低い傾向が示されていた。

表 I-49 聴力

	度数	パーセント
普通	12,455,161	55.71
やっと聴き取れる	5,608,605	25.09
大きな声聴き取れる	3,592,751	16.07
ほとんど聴こえない	274,410	1.23
判断不能	425,830	1.90
合計	22,356,757	100.00

(34) 意思の伝達

意思の伝達は、「伝達できる」が 16,175,510 名(72.35%)で全体の 7 割以上が意思の伝達できると回答されていた。「できない」は、5%未満であった。

表 I-50 意思の伝達

	度数	パーセント
伝達できる	16,175,510	72.35
ときどき伝達できる	3,637,322	16.27
ほとんど伝達できない	1,479,714	6.62
できない	1,064,211	4.76
合計	22,356,757	100.00

(35) 指示への反応

指示への反応は、「通じる」が 16,228,072 名(72.59%)で全体の 7 割以上で最も高い割合を占めていた。自立している割合は、「意思の伝達」とほぼ同様の割合であった。

表 I-51 指示への反応

	度数	パーセント
通じる	16,228,072	72.59
ときどき通じる	4,868,748	21.78
通じない	1,259,937	5.64
合計	22,356,757	100.00

(36) 毎日の日課を理解

毎日の日課を理解しているかについては、理解「できる」が 14,613,056 名(65.36%)で、全体の 6 割以上は、日課に関する理解があると示された。

表 I-52 毎日の日課を理解

	度数	パーセント
できる	14,613,056	65.36
できない	7,743,701	34.64
合計	22,356,757	100.00

(37) 生年月日をいう

生年月日をいうことは、「できる」が 18,092,092 名(80.92%)で、全体の 8 割以上が自分の生年月日をいうことができた。

表 I-53 生年月日をいう

	度数	パーセント
できる	18,092,092	80.92
できない	4,264,665	19.08
合計	22,356,757	100.00

(38) 短期記憶

短期記憶は、「できる」が 14,933,362 名(66.80%)で全体の 6 割以上を占めていた。毎日の日課を理解している割合とほぼ同じ値を示していた。

表 I-54 短期記憶

	度数	パーセント
できる	14,933,362	66.80
できない	7,423,395	33.20
合計	22,356,757	100.00

(39) 自分の名前をいう

自分の名前をいうは、「できる」が 20,628,078 名(92.27%)で、全体の 9 割以上は自分の名前をいうことができた。これは生年月日をいうことができる者よりも多かった。

表 I-55 自分の名前をいう

	度数	パーセント
できる	20,628,078	92.27
できない	1,728,679	7.73
合計	22,356,757	100.00

(40) 今の季節を理解

今の季節を理解は、「できる」が 16,162,087 名(72.29%)で、全体の 7 割以上を占めていた。この割合は、意思伝達できる割合と同程度であった。

表 I-56 今の季節を理解

	度数	パーセント
できる	16,162,087	72.29
できない	6,194,670	27.71
合計	22,356,757	100.00

(41) 場所の理解

場所の理解は、「できる」が 17,730,249 名(79.31%)で、全体の 8 割近くを占めており、生年月日をいうことができるとはほぼ同じ割合が回答できると示された。

表 I-57 場所の理解

	度数	パーセント
できる	17,730,249	79.31
できない	4,626,508	20.69
合計	22,356,757	100.00

(42) 被害的

被害的な言動や行為の有無に関しては、「ない」が 20,127,432 名(90.03%)で全体の 9 割程度であったが、1 割の高齢者には、発生している問題行動であった。

表 I-58 被害的

	度数	パーセント
ない	20,127,432	90.03
ときどきある	941,117	4.21
ある	1,288,208	5.76
合計	22,356,757	100.00

(43) 作話

作話の有無については、「ない」が 20,874,959 名(93.7%)であった。作話の発生率は、7%前後である。

表 I-59 作話

	度数	パーセント
ない	20,874,959	93.7
ときどきある	571,703	2.56
ある	910,095	4.07
合計	22,356,757	100.00

(44) 幻視・幻聴

幻視・幻聴の有無については「ない」が 20,013,882 名(89.52%)で、全体の 1 割程度に幻視・幻聴は発生していた。

表 I-60 幻視幻聴

	度数	パーセント
ない	20,013,882	89.52
ときどきある	1,018,704	4.56
ある	1,324,171	5.92
合計	22,356,757	100.00

(45) 感情が不安定

感情が不安定な状況は、「ない」が 18,620,708 名(83.29%)で全体の 83%を占めていた。全体の 17%程度は、感情が不安定な状況が発生していた。

表 I-61 感情が不安定

	度数	パーセント
ない	18,620,708	83.29
ときどきある	1,558,599	6.97
ある	2,177,450	9.74
合計	22,356,757	100.00

(46) 昼夜逆転

昼夜逆転は、「ない」が 17,909,078 名(80.11%)で全体の 8 割程度であったが、「ある」が 12.03%、「ときどきある」が 7.86%と合計で 4,447,679 名もの多くの要介護高齢者に重症の睡眠障害である昼夜逆転の症状が発生していた。

表 I-62 昼夜逆転

	度数	パーセント
ない	17,909,078	80.11
ときどきある	1,757,969	7.86
ある	2,689,710	12.03
合計	22,356,757	100.00

(47) 暴言・暴行

暴言・暴行は、「ない」が 19,981,897 名(89.38%)で全体の 9 割近くを占めていたが、被害的な妄想や幻視・幻聴などと同様に 1 割程度の要介護高齢者にみられることが示された。

表 I-63 暴言・暴行

	度数	パーセント
ない	19,981,897	89.38

ときどきある	960,646	4.30
ある	1,414,214	6.33
合計	22,356,757	100.00

(48) 同じ話をする

同じ話をするは、「ない」が18,085,353名(80.89%)で全体の8割程度を占めていたが、「ある」も3,147,969名(14.08%)と他の問題行動と比べて、高い割合で発生していることが示された。

表 I-64 同じ話をする

	度数	パーセント
ない	18,085,353	80.89
ときどきある	1,123,435	5.03
ある	3,147,969	14.08
合計	22,356,757	100.00

(49) 大声を出す

大声を出すことの有無については、「ない」が19,930,094名(89.15%)で全体の9割近くを占めていたが、1割は大声を出しているということがわかった。

表 I-65 大声を出す

	度数	パーセント
ない	19,930,094	89.15
ときどきある	950,459	4.25
ある	1,476,204	6.60
合計	22,356,757	100.00

(50) 介護に抵抗

介護に抵抗すること「ない」は、18,529,834名(82.88%)で全体の8割程度を占め、「介護に抵抗することがある」は2,378,645名(10.64%)と示された。これは、感情が不安定な高齢者の割合とほぼ同じで、17%の要介護高齢者が介護に抵抗することがあることがわかった。

表 I-66 介護に抵抗

	度数	パーセント
ない	18,529,834	82.88
ときどきある	1,448,278	6.48
ある	2,378,645	10.64
合計	22,356,757	100.00

(51) 常時の徘徊

常時の徘徊は、「ない」が 20,669,552 名(92.45%)で全体の 9 割以上であったが、「ある」が 1,233,957 名 (5.52%) と示され、わが国の 123 万人もの高齢者が「常時徘徊あり」と示された徘徊老人であった。

表 I-67 常時の徘徊

	度数	パーセント
ない	20,669,552	92.45
ときどきある	453,248	2.03
ある	1,233,957	5.52
合計	22,356,757	100.00

(52) 落ち着きなし

問題行動となるような「落ち着きがない」状態の要介護高齢者は、905,812 名(4.05%)で、全体の 6 割に落ち着きなしと判断される状況が発生していた。

表 I-68 落ち着きなし

	度数	パーセント
ない	20,859,799	93.30
ときどきある	591,146	2.64
ある	905,812	4.05
合計	22,356,757	100.00

(53) 外出して戻れない

外出して戻れないという問題行動を持った要介護高齢者は、738,925 名(3.31%)であった。

表 I-69 外出して戻れない

	度数	パーセント
ない	21,270,239	95.14
ときどきある	347,593	1.55
ある	738,925	3.31
合計	22,356,757	100.00

(54) 一人で出たがる

一人で出たがるという問題行動がある要介護高齢者は、732,280名(3.28%)で外出して戻れない要介護高齢者の割合と類似していた。

表 I-70 一人で出たがる

	度数	パーセント
ない	21,232,199	94.97
ときどきある	392,278	1.75
ある	732,280	3.28
合計	22,356,757	100.00

(55) 収集癖

収集癖がある要介護高齢者は、626,085名(2.8%)であった。

表 I-71 収集癖

	度数	パーセント
ない	21,488,620	96.12
ときどきある	242,052	1.08
ある	626,085	2.80
合計	22,356,757	100.00

(56) 火の不始末

火の始末ができない要介護高齢者は、「ときどき」できない高齢者が993,300名(4.44%)で、全体の7.2%を示していた。

表 I-72 火の不始末

	度数	パーセント
ない	20,744,174	92.79
ときどきある	993,300	4.44
ある	619,283	2.77
合計	22,356,757	100.00

(57) 物や衣類を壊す

物や衣類を壊す要介護高齢者は、230,089名(1.03%)で、全体として少なかった。

表 I-73 物や衣類を壊す

	度数	パーセント
ない	21,931,919	98.10
ときどきある	194,749	0.87
ある	230,089	1.03
合計	22,356,757	100.00

(58) 不潔行為

不潔行為がある要介護高齢者は、627,645名(2.81%)であった。「ときどきある」高齢者が2.15%で、全体の約5%に不潔行為があることがわかった。

表 I-74 不潔行為

	度数	パーセント
ない	21,249,095	95.05
ときどきある	480,017	2.15
ある	627,645	2.81
合計	22,356,757	100.00

(59) 異食行動

異食行動があるのは、237,264名(1.06%)で、「ときどき」ある高齢者を含めて、約2%にこの問題行動があることがわかった。

表 I-75 異食行動

	度数	パーセント
ない	21,918,675	98.04
ときどきある	200,818	0.90
ある	237,264	1.06
合計	22,356,757	100.00

(60) ひどい物忘れ

ひどい物忘れは、「ない」が12,724,237名(56.91%)で全体の半数程度を占め、次いで「ある」が6,133,583名(27.43%)で多かった。

表 I-76 ひどい物忘れ

	度数	パーセント
ない	12,724,237	56.91
ときどきある	3,498,937	15.65
ある	6,133,583	27.43
合計	22,356,757	100.00

(61) 座位保持

座位保持は、「できる」が11,593,174名(51.86%)で全体の半数程度を占めていた。また、「支えてもらえばできる」、「自分の手で支えればできる」がそれぞれ全体の2割程度を占め、「できない」は、4.37%と少なかった。

表 I-77 座位保持

	度数	パーセント
できる	11,593,174	51.86
自分の手で支えればできる	4,811,884	21.52
支えてもらえばできる	4,973,602	22.25
できない	978,097	4.37
合計	22,356,757	100.00

(62) 排尿

排尿は、「自立」が10,505,158名(46.99%)で全体の半数程度を占めていた。次いで、全介助が5,475,187名(24.49%)が続いていた。

表 I-78 排尿

	度数	パーセント
自立	10,505,158	46.99
見守り等	4,385,364	19.62
一部介助	1,991,048	8.91
全介助	5,475,187	24.49
合計	22,356,757	100.00

(63) 排便

排便は、「自立」が 11,465,554 名(51.28%)で全体の半数程度を占め、次いで全介助が 5,613,467 名(25.11%)であった。排尿よりも排便のほうが自立度が高いことが示された。

表 I-79 排便

	度数	パーセント
自立	11,465,554	51.28
見守り等	3,025,235	13.53
一部介助	2,252,501	10.08
全介助	5,613,467	25.11
合計	22,356,757	100.00

2.新旧共通項目からみた要介護高齢者の特徴（医療処置に関する項目）

(1) 点滴の管理

点滴の管理は、1,012,082 名(4.53%)に実施されていた。

表 I-80 点滴の管理

	度数	パーセント
ない	21344675	95.47
ある	1012082	4.53
合計	22356757	100.00

(2) 中心静脈栄養

中心静脈栄養は、106,035 名(0.47%)に実施されていた。

表 I-81 中心静脈栄養

	度数	パーセント
ない	22,250,722	99.53
ある	106,035	0.47
合計	22356,757	100.00

(3) 透析

透析は、242,420 名(1.08%)に実施されていた。

表 I-82 透析

	度数	パーセント
ない	22,114,337	98.92
ある	242,420	1.08
合計	22,356,757	100.00